

「批判的思考力」で主体性養う

第31回時事通信社「教育奨励賞」優良賞受賞校④

●東京都立川市立立川第二中学校



「その答えの根拠は?」「情報はうのみにしないで」。東京都立川市立立川第二中学校(常盤隆校長、生徒数532人)では、こんな言葉が授業に頻繁に登場する。「クリティカル・シンキング(批判的思考力)」と呼ばれる言語活動で、従来の暗記中心の教育法とは一線を画す。常盤校長は

「子どもたちが主体性を持ち始め、教師自身も実践することで学校全体が積極的になってきた」と話す。

同校は2010年度、立川市の指定を受け、言語活動の取り組みを開始。11年度からは東京都の言語能力向上推進校にも選ばれた。開始当初の生徒たちは「周りの空気を読むような子が多く、自信がないように見えた」(常盤校長)という。そこで、「思考・判断・表現」の力を授業や学校生活で育てることとした。総合的な学習の時間を中心に「理性と感情、事実と主張の区別」といったテーマの講座から、自分自身の考えをまとめ、分かりやすい形で表現しながら対話することを学ばせた。

さらに、生徒たちに身近な話題で、集団討論につなげていった。「ピアスを着けた転校生がやつ

て来る」といううわさを耳にした時に、どう対応するか。生徒からは「それはうわさでしょ?」「誰から聞いたの?」「直接、会って確認すべきだ」と、さまざまな意見が出された。常盤校長は「答えを出したり判断ができたりすること以上に、そこに至るプロセスが大事だ」と語る。

クリティカル・シンキングは、各教科にも及んでいる。例えば、国語の太宰治「走れメロス」。物語は「メロスは激怒した」で始まり、「勇者は、ひどく赤面した」で終わる。教師は「なぜ『勇者』に変わったのか」と問うと、「〇〇したからだと思う」「いや、僕はここの場面だと思う」といった議論が起ころ。そこに、「メロスは本当に勇者なの?」という疑問が出された。「もちろん正解はないが、主張するには根拠と理由が必要になることが分かってくる」と常盤校長。

理科の実験では、個人の予想をプリントに記入し、発表。教室全体に個々の考えを広げる。実験結果に対して「なぜなのか」を問い、科学的思考を身に付けさせるといふ。教師からは『教科書に書いてあるから』というのは理由にならないよ』といった言葉が飛ぶ。実験後は「振り返りシ

ート」を活用し、「何が分かったのか」「目標や課題をどれぐらい達成できたか」といった項目で、単元に対する自覚を促す。

こうした授業実践の結果、全国学力・学習状況調査(全国学力テスト)の結果は全国平均を上回り、学習意欲も高まったことが生徒アンケートから分かった。また、家庭学習に取り組む生徒数も増加した。

「ビブリオバトル」も行われている。各自5分間で自分の推薦する本を紹介し、読みたくなった本に投票してもらおう書評合戦だ。表現方法の習得につながるだけでなく、他者の興味関心に触れることで読書の幅も広がるという。もともとは国語の授業での取り組みだったが、15年度からは図書委員会主催のイベントとして実施。市立図書館主催のビブリオバトルでは、同校の生徒が紹介した作品が、最も読みたい本(チャンプ本)に選ばれるという成果も残している。

研究授業は「全員参加」

クリティカル・シンキングを学ぶのは、生徒だけではない。教師自身も集団討論などの研修で体験する。ある時は、スーダンの飢餓を訴えた「ハゲワシと少女」の写真を見て、意見を交わした。常盤校長は「女の子がかわいそう」という感情的な言葉ではなく、カメラマンの意図や行動をどう読み解くか、各自の意見を出してもらった」と話す。

さらに特徴的なのは研究授業だ。一般的には、

ある教師の行った授業を見学した後、感想を言い合う「1対多数型」だが、同校では「全員参加型」で実施する。関田光行主幹教諭は「指導案作成は1人に丸投げしない」と強調。授業を行う教師が作った案を、研究推進委員会で手直しする。道徳ではこれに加えて、教師が生徒役になって模擬授業も行った。これにより、各教師が当事者意識を持って研究に関われるという。「極端に言えば、担当の教師には授業をやってもらうだけ。みんなで責任を持って授業をつくっていく仕組みだ」と胸を張る。

研究授業当日、見学する教師たちは手にペンと黄色の付箋を持つ。付箋には時刻と教師の発問、子どもたちの変化を記入。これを「根拠」として、授業後の検討会に臨む。



総合学習で修学旅行のまとめの発表資料を作る3年生

授業後の検討会に臨む。グループに分かれて模造紙に黄色の付箋を貼付した上で、良かったこととは青色、課題は赤色の付箋に書き込み、貼り付けていく。関田主幹教諭は

「こうすることで、教師の発問との関係が見えてくるし、全員が発言できる」と説明。常盤校長も「声高な人ばかりが発言する場にしたくなかった。このやり方なら、根拠はそろっているから担当教科も関係なく、全員が参加可能だ」と続けた。

生活や行事に自主性広がる

クリティカル・シンキングの講座では15年度から、インターネットの利用ルールについて話し合う取り組みを始めた。3年生の教室では、スマートフォン^①の無料通信アプリ「LINE（ライン）」のやりとりについて議論。利用時間に制限を設ける家庭が多かったが、「午後9時まで」「午後10時まで」と時間がまちまちで、そのことがトラブルの原因になっていることが判明した。

話し合いの末、生徒たちが導き出したのは「お互いの家庭のルールを尊重する」という結論だった。常盤校長は「子どもたちは『ルールは自分たちのために作るものだ』と言っていて立派だった」と述べた。

授業や講座を通じてクリティカル・シンキングを習得した生徒たち。昨年12月、その変化を象徴する出来事があった。以前から、体育館の更衣室が汚れていることを気に掛けていた3年生の複数生徒が、生徒会の中央委員会で解決策を議題に挙げた。1時間以上の議論の結果、3年生の学級委員が「私たちがやる」と提案。すると、1年生と2年生は「先輩だけに任せてはおけない」と、一緒に清掃することが決まった。

翌日、生徒たちは散らかったごみを取り除き、雑巾掛けをした。その生徒が笑顔だったことに常盤校長は驚いた。理由を尋ねると、「私たちの提案に賛同してくれて、一緒に掃除ができたことがうれしい」と言葉が返ってきたという。

問題意識と提起、解決法の議論、そして実際の行動。教師が促さずとも、この一連の流れを生徒たち自身で行うことができた。「子どもたちの議論や行動を待つことの大切さを感じたが、教師にとつてはこれが一番難しい」と常盤校長。「じれったいこともあるし、時間もかかる。それでも怒鳴ったりせずに子どもたちを信じて待つのがうちのやり方」という。関田主幹教諭も「自修」と「学修」という言葉を挙げ、「生徒自身が声を掛け合い、たとえ話が脱線しても修正していく。それが勉強だけでなく生活指導にもつながっている」と意義を語る。

常盤校長と記者が3年生の教室を回っていると、ある男子生徒が、ふと「校長先生の好きな言葉って『主体性』ですよ」と投げ掛けてきた。常盤校長は「そうだね。知っていてくれてうれしい」と返した。「彼らが自分から動き、働き掛けてくれる人物になってくれれば」。常盤校長の切なる願いだ。（斉藤 大Ⅱ内政部）

普通の教師が普通の生きている学校

モンスター・ペアレント論を超えて

スパー先生でなくても、カリスマ教師でなくても、普通の先生が普通に頑張ることが学校にとってはとても大切な「二元気」を出して先生が頑張れる秘訣を伝授！

小野田 大坂大学大学院教授 小野田正利 著 ● 四六判 ● 198頁 ● 定価1,400円（税別）

時事通信社